

聖ラーマクリシュナの生涯略伝

聖ラーマクリシュナの誕生

タクール、聖ラーマクリシュナは、フーグリー地方にあるカマールプクル村のバラモン階級の家において、ファルゲン月(二―三月)白分二日目はくぶんに誕生された。カマールプクル村はジャハナバード(アラムバーク)から八マイル(十二キロ)西、またポルドワンから二十四、五マイル(四十キロ)南である。

(訳註―太陰暦を用いたベンガル暦で新月の次の日から満月までを白分はくぶん、満月の次の日から新月までを黒分くろぶんという)

タクール、聖ラーマクリシュナの誕生日については異説がある。

アムピカ師による天宮図ホロスコープ。この天宮図はタクールの病気の時期、ベンガル暦一二八六年(西暦

一八七九年)カルティク月(十一月)三日に作成されたものである。これによると誕生日はシヤカ暦

一七五六年ファルゲン月十日、水曜日、白分二日、二十七星宿ナクシャトラーはプールヴァ・バードラバーダ(室宿)。

星命一七五六―一〇―九―五九―一二。

クシエートラナート・バットがベンガル暦一三〇〇年に作製した天宮図によると、星命は一七五四

―一〇―九―〇―一二。これによると、シヤカ暦一七五四年ファルゲン十日、水曜、白分二日、

プールヴァ・バードラバーダ(室宿)で、すべて合っている。ベンガル暦二二三九年二月二十日(西暦

一八三三年)の生まれとなる。誕生の時刻は、宝瓶宮アフエガアスにおいて、太陽ラフイと月チャンドラと水星プタが合ゴウ(十度以内の位置にいる)をなしている。また木星は金星と合ゴウを生じているので、宗教の祖とされるであろう。

ナラヤン・ジヨティールブーシヤンの新しい天宮図(僧院で作成)。この算命によると、ベンガル暦一四二二年ファルグン月六日、西暦一八三六年二月一七日、水曜日の未明午前四時、ファルグン白分二日目となっており、太陽、月、水星の合もその他の星の座相もすべて同じである。ただアムビカ師が記入したファルグン十日だけが合わない。一七五七—一〇—五—五九—二八—二二。

タクルルは人間の肉体で五十一、ないし五十二年の間、この地上におられた。

父クディラーム、母チャンドラマニ

タクルルの父親クディラーム・チョットパツダエはきわめて信心深く、神の最良の信仰者であられ

(原典註1) 太陽ラフイと月チャンドラと水星プタが合ゴウをなしている——「原典」コタムリト第四卷第二十三章」参照。

(以下、補足——原典第四卷第二十三章第九節一八八五年七月十五日付け「不滅の言葉」の中に信者のギリシュゴーシユとラーマクリシュナの天宮図に関する会話がある)

ギリシユ「ははは……。実は、あなた様の天宮図を見たいと思ひまして——」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ。そうかい。わたしは白分二日目の生まれだ。それに、太陽ラフイと月チャンドラと水星プタ——。これ以外にはあまりこれといったことはないようだよ」

ギリシユ「宝瓶宮アフエガアスのお生まれです。ラーマは天蠟宮スクリヒヤ、クリシュナは金牛宮トールラス、チャイタニヤは獅子宮シオリです」

た。母のチャンドラマニ・デーヴィーもまた、慈悲の権化のような女性であられた。以前、この方々はデレという村に住んでおられた。カマールプル村から三マイル（五キロ）ほど離れたところである。その村に訴訟事件が起こった時に、クデイラームは地主のためになる証言をしなかった。それで、その後間もなく、親戚身内を引き連れてカマールプル村に引越してこられたのである。

幼年時代

タクール、聖ラーマクリシュナの子供時代の名はガダーダル（ベンガル語発音ではゴタドル）。小学校ではほんの少し読み書きを学んだ後はずっと家にいて、ラグヴィル（ラグ族の英雄、即ちラーマのこと）の像を熱心に拝み仕えておられた。自分で花を摘んできて供えては、毎日、毎晩、神像にお仕えしておられた。小学校では、「算術がさっぱりわからなくて、ほんとに困ったよ」と、後によくご自分で話されていた。

誰にも習わないのに歌を上手にうたうことがお出来になった。——それは、それは、甘いやさしい声で——。宗教劇（ヤートラ）を見物されると、芝居のなかの歌や文句をほとんど覚えては、その通りに歌われるのだった。子供時代はまことに楽しく幸福であられた。近隣の子供たちや老人や婦人たちの誰もが、この御方を心から愛していた。

家のそばにラハ族の家があつて、そこに宿泊所があり、いつも修行者たちが出入りしていた。ガダーダルは毎日のようにそこで修行者たちといっしょにいたり、進んで世話をしたりしておられた。プラー

ナ(聖典)を朗読している時には、一心不乱に一語も聞きもらさず、熱心に聞き入っておられた。このようにして、ラーマヤーナ、マハーバラタ、シュリーマッド・バーガヴァタなどの話を全部、胸に納めてしまわれたのである。ある日、隣のアヌール村に行くため野原を通っておられた。お年は十一才であられた。後にタクルが御自分で語られたことであるが、その時、突如として靈妙不可思議な光をご覧になり、外界の一切が空になるという経験をされた。人々は気絶したのだと言ったが、おそらくタクルは三昧サマデーに入られたのである。

父の死後カルカッタへ——カーリー寺院

父クデイラムが亡くなった後、タクルは長兄と共にカルカッタにおいでになった。その時、この御方のお年は十七才から十八才の間である。カルカッタにおいて、数日はナティル・バガンで、数日はジャマプクルのゴーヴィンダ・チャトジェーの家に滞在されて、お祈りプージャをして廻られた。このことが縁となつて、ジャマプクルのミトラの家で何日か祈禱をなさつた。

ラーニ・ラースマニがカルカッタから三マイル(五キロ)ほど離れた南神ドツキネーシヨルの地に、カーリー神殿を建立した。ベンガル暦一二六二年、ジョイスト月一八日、木曜日、沐浴ステーナ・ヤトワ祭の日である(英国式に言

(訳註) ジョイスト月(5月中旬〜6月中旬)の満月の日にジャガンナータ(ヴィシヌ神)を沐浴させるために巡行する祭典。

(實註)

えばキリスト暦一八五五年五月三十一日)。タクール、聖ラーマクリシユナの長兄、パンデイト・ラームクマールが主司祭として雇われた。それでタクールも、時々カルカタからそこを訪ねて行かれたが、間もなくご自分も役僧となられた。そのとき、二十一才から二十二才の間である。次兄のラーメーシユワルも、時々カーリー神殿の役僧の仕事をしていた。この方には二人の子息、ラームラルとシヴァラームと一人の娘、ラクシユミー・デーヴィーがあつた。

タクールの境地の変化、結婚式、女神を見ること、狂気の様相

しばらく役僧の仕事をしているうちに、聖ラーマクリシユナの精神状態が變つた様子になつた。一日中ただ茫然自失の有様で、女神の像のそばに坐りつづけておられるのであつた。

身内の人たちは相談して、このお方に結婚させた。結婚させればまた情況が變わるかもしれない、と期待したからである。カマールブクル村から四マイル(六キロ余)離れたジャヤランバテイ村のラーム・チャンドラ・ムコパッターエの娘、サーラダーマニ・デーヴィーと結婚式を挙げられたのは一八五九年のことである。タクールのお年は二十二、三才、後の大聖母^{シユリー・シユラーマ}は六才であられた。

結婚式を済ませて、聖ラーマクリシユナが南^{ドツクネーシユル}神村のカーリー寺院に戻つてこられて数日後、このお方の様子は全く變つてしまつた。カーリーの神像に仕えて礼拝しているうちに、世にも不思議な、たとえばようもなく美しい大女神の姿を御覧になりはじめたのである。小鈴を鳴らしながらお灯明をあげようとなさるのだが、途中で出来なくなつて止めてしまわれる。礼拝するために坐つても、途中で

出来なくなられる。どうかすると、神前に捧げる花をご自分の頭にのせていらつしやる。

もう寺院の勤めも出来なくなり、狂人のようにあちこちをフラフラと歩き廻るようになられた。ラーニ・ラースマニの娘婿のマトゥールは、このお方を偉大な聖者であると認めてお世話をし始め、他のバラモン僧を連れてきて大実母カーリーの礼拝奉仕させることにした。それで、タクールの妹の息子フリダイ・ムコパツダエを呼びよせて、この役目と、タクール、聖ラーマクリシュナの日常のお世話を任せた。

タクールはもう二度と、寺での勤行もなさらず、また世間並みの生活をもなさらなかった。もちろん結婚などは、名ばかりのものであった。終日、大実母！ 大実母！ と口走りながら、時には感覚のない木偶人形のように、時には狂人のように、あたりをうろついておられた。またある時は幼児のようになつたり、女と金に執着した世俗的な人々を見ると、物陰に隠れたりなさるのだった。神様に関係のある人や、神についての話のほかには何一つ関心を示そうとなさらなかった。ただひたすら、大実母！ 大実母！ カーリー神殿には無料宿泊所があつて（現在でもある）、修行者や出家たちが常に泊まっていた。トーター・プリーがここに十一ヶ月の間滞在して、タクールにヴェーダーンタ哲学を教えた。少し教えているうちに、トーター・プリーはタクールが無分別三昧（最高の三昧）に入つてい

（原典註2）これはラーニ・ラースマニのカーリー寺院の売買証書によるものである。譲渡証書によると寺院の用地購入は一八四七年九月六日で、登記は一八六一年八月二十七日、価格は二十二万六千ルピーであった。

るのを見た。キリスト暦一八六六年のことである。

バラモンの女行者ブラフマニーがそれ以前（一八五九年）にここへ来て、タントラの修行法をひと通り伝授してくれ、また、タクルルのことを聖ガウランガ（チャイタニヤ）と見なして、（シュリー・チャリタムリタ）不滅の行法^グなどのヴィシユヌ派の聖典をいろいろ読んで聞かせた。タクルルにトーター・プリーがヴェーダーンタ哲学を聞かせているのを知って、この女行者は大変心配してこう言った——「ババ、ヴェーダーンタを聞いてはいけませんよ。あんなのを聞いていると、せつかくの法悦^{パウワ}や信仰^{バクティ}が薄まってしまうすよ」

ヴィシユヌ派の学者^{パンディット}、ヴァイシュナヴァ・チャランも始終ここへ来た。彼はタクルルをカルトラのチャイタニヤ集会へお連れした。この集会で、タクルル、聖ラーマクリシュナは前三昧状態で聖チャイタニヤ^{デシヤ}様の座へ上がって坐られた。ヴァイシュナヴァ・チャランはチャイタニヤ集会の首長^{おさま}であった。

ヴァイシュナヴァ・チャランはマトウールに向かって次のように言った。「これ（タクルルの状態）は、気が狂ったのとは全くちがう——愛の歓喜に我を忘れた状態である。この御方は、神のために他的一切を忘れておられる」前述のバラモンの女行者とこのヴァイシュナヴァ・チャランは、タクルルのマハーバーヴァ（大恍惚）の状態を正しく理解したのであった。タクルルはこのころ、ちょうどチャイタニヤ^{デシヤ}様の^{デシヤ}ように、時には内的恍惚、時には無生物のようになって三昧に入ったり、また半覚醒状態になったり、普通の状態になったりされていた。

大実母との対話

タクルルは、大実母^マ、大実母^マと呼んでは泣かれた——。そしていつも宇宙の大実母と対話をされ、大実母から教訓や指示をいただいでおられた。「マ—よ、わたしはおまえの言葉を聞くだけで。わたしはお経や聖典も知らない。学問も知らない。おまえが教えてくれることをそのまま信じるだけで」
と常に言っておられた。タクルルは、次のことを理解しておられ、また常に口にしておられた。

「至高のブラフマン、完全なる実在^{サット}と智慧^{チット}と歓喜^{アニナンダ}、その御方こそ大実母^マである」

タクルルに向かつて、この宇宙の大実母は語られた。「おまえとわたしは一つ。おまえは信仰と愛を持ってこの世に住みなさい——人びとの幸いの為にね。信者たちが集まってくるよ。そのときお前は、世俗の者たちだけで会ってはいけない。大勢の純粹無欲な信仰者たちもいるから、その者たちがここへ来るだろうよ」神殿^{アーユラテ}の献灯の時、鈴の音が鳴りだすと聖ラーマクリシュナは館^{クテ}の屋上に行かれては大声で呼ばれるのだった。「オーイ、わたしの信者たち—イ、おまえらは一体誰だ—ア、何処に今いる—ウー、はやく大急ぎでやってこ—い」

母親のチャンドラマニ・デーヴィーに対して、タクルルは宇宙の母(ドゥルガー女神)のいま一つの姿であると理解され、その気持ちで仕えておられた。長兄ラームクマルが逝去すると、母親は息子に先立たれた悲嘆のために健康を損ねた。その後三、四年の間、カーリー神殿に連れてこられて、ご自分のそばに住まわせ、毎日会いに行かれて母親の足を拝しては、「お母さん、ご気分はいかが？」と尋ねられた。

タクルルは二度、聖地巡礼に行かれた。一度目は母親を伴われ、ラーム・チャトジュー氏とマトウー

ル氏の息子たちがいっしょだった。このときは、カーシー（バラナシ）までやつと鉄道が引かれたばかりのときだった。異状な状態が五、六年くらい続いていたときの間のことだった。そのときは、朝から晩までほとんど三昧の状態か、または歓喜に恍惚と酔っておられた。ヴァイディヤナートとカーシーとブラヤーガを見られた。キリスト暦一八六三年のことである。

第二回目の聖地巡礼は、それから五年後のキリスト暦一八六八年一月である。マトウール氏と彼の夫人ジャガダンバ・ダシーといっしょであった。この度は甥のフリダイも同伴をした。この旅行では、カーシー（バラナシ）、ブラヤーガ、聖プリンダーヴァンを訪ねてこられた。カーシーのマニカルニカ（・ガート）で三昧サマディに入られて、主ヴィシユワナート（宇宙の主シヴァ）が死んでいく人たちの耳に、救いの神の名前を聞かせておやりになっている光景をご覧になった。また、沈黙の誓いをしている行者トライランガ・スワミと対話をなさった（訳註——身振り手振りで）。マトウラーへ行かれて、ドウルヴァ・ガートでヴァースデーヴァ（クリシュナの父）の腕に抱かれた聖クリシュナや、プリンダーヴァンでは、夕方、牧場で聖クリシュナが牝牛を連れてヤムナー河を渡ってこられるなどの楽しい霊姿を半三昧の眼でご覧になったりした。ニドゥの森では、ラーダーへの愛に浸りきったガンガーマーターと語り合っており、この上ないよるこびの時を過ごされた。

ケーシャブ・セン氏との交渉、集まってきた信者たち

ケーシャブ・セン氏が門弟たちと共にベルガルの別荘において神を冥想し思索に過していた時、夕

クル、聖ラーマクリシュナは甥のフリダイを伴って彼に会い行かれた。キリスト暦一八七五年のことである。ネパールの、^グキャプテン^グであるヴィシユワナート・ウパッダエは、この時期からずっとタクールの許に通ってくるようになった。シンティイのゴパール（年長のゴパール）とマヘンドラ・カヴィラージ、クリシュナーガルのキシヨリーとマヒマーチャランもこのとき初めてタクールにお目にかかった。

タクールの内輪の弟子たち——即ちタクールの昇天後、力を合わせて師の教えを全インド、全世界に宣布した弟子たちは、キリスト暦一八七九年、一八八〇年ころから、タクールのそばに集まり始めた。彼等がタクールにお会いしたときは、タクールは狂人のような様子はもうほとんどなくなっていた。静かに落ち着いて、しかも無邪気な子供のようになつておられた。しかも、ほとんど絶えまなく三昧サマーディに入られるのだつた。時にはジャダ・サマーディ、時にはパーヴァ・サマーディに入れ、三昧から戻られた後は恍惚としてその辺をお歩きになるのが常であつた。まるで五才の幼童のように、始終、^マ大実母^マ！ ^マ大実母^マ！^マと言つておられた。

ラーム（ラーム・チャンドラ・ダッタ、医師）とマノモハン（ラームのいとこ従弟）はキリスト暦一八七九年の終わりころから来て信者になつた。ケダル、スレンドラが彼等に続いて来た。チュニー、ラトウ、ニティヤゴパール、ターラクも続いてやってきた。一八八一年の終り頃から一八八二年のはじめにかけて、ナレンドラ（後のヴィヴェーカーナンダ）、ラカール（後のブラフマーナンダ）、バヴァナート、バブラーム、バララーム、ニランジャン、校長（この本の著者、マヘンドラ・ナート・グプタ）、ヨーギンが相前後して集まっ

てきた。一八八三年から四年にかけては、キシヨリー、アダル、ニタイ、若いゴパール、ベルガルのターラク、シヤラト、シヤシー。一八八四年にはサンニヤール、ガンガーダル、カーリー、ギリシユ、デベンドラ、サーラダー、カリパダ、ウペンドラ、ドウイジャ、ハリ。一八八五年にはスボドゥ、若いナレンドラ、パルトゥ、プールナ、ナラヤン、テジチャンドラ、ハリパダが来た。

このようにしてハラモーハン、ジャゲーシユワル、ハズラー、クシーロド、クリシユナーガルのヨージン、マニンドラ、ブーパティ、アクシヤイ、ナヴァゴパール、ベルガルのゴーヴィンダ、アシユ、ギリンドラ、アトゥル、ドウルガーチャラン、スレシユ、プランクリシユナ、ナヴァイ・チャイタニヤ、ハリプラサンナ、マヘンドラ（ムコパッタエ）、プリヤ、サードゥ、プリヤナート（マンマト）、ビノド、トゥルシー、ハリシユ・ムスタフイ、バサーク、カターク・タクル、バリのシヤシー（ブラフマチャーリー）、ニティヤゴパール（ゴースワミー）、コンナガルのヴィピン、ビハリ、ディレン、ラカール（ハラダリ）などが次々とタクルの許^{もと}へ来た。

イーシユワラ・ヴィディヤサーガル、^{バンディット}学者シヤダ、ドクター・ラジェンドラ、ドクター・サルカル、バンキム（チャトジェー）、アメリカ人のミスター・クック、信者ウイリアムス、ミスター・ミシル、マイケル・マドゥスターダン、クリシユナダース（パル）、^{バンディット}学者ディーナバンドゥ、^{バンディット}学者シヤーマバダ、ラームナラヤン博士、ドウルガーチャラン博士、ラディカ・ゴースワミー、シシル（ゴシユ）、ナヴィン（ムンシー）、ニールカಂತなどの人々もタクルにお会いした。タクルはトライランガ・スワミと聖地カーシー（バラナシ）で、ガンガーマーターとは聖プリンダーヴァンの地で会見された。

ガンガーマーターはタクールを愛らしきラーダー（クリシュナの恋人）と見なしていて、プリンダーヴァンに引き留めようとした。

身内のような信者たちが集まってくるまでに、クリシュナキシヨル、マトウール、シャンプー・マリック、ナラヤン・シャーストリー、この地（ベンガル）の学者ガウリー、チャンドラ、アチャラーナンダたちが、しばしばタクールにお会いしていた。ポルドワンの藩王の顧問学者パドマローチャン、アーリヤ協會のダヤーナンダにも会われた。タクール生誕の地であるカマールプクル村、およびシオル、シャーマバザール等の地方からも大勢の信者たちがこの方にお会いした。

ブラフマ協會の人たち、バガヴァン・ダース・ババジのこと

ブラフマ協會サマシからも大勢の人がタクールの許もとに出入りしていた。ケーシヤブ、ヴィジヤイ、カーリー（・バス）、プラタプ、シヴァナート、アムリタ、トライローキヤ、クリシュナビハリ、マニラル、ウメシユ、ヒーラナンダ、バヴァーニー、ナンダラルはじめ、さまざまな多くのブラフマ協會員がいつも来ていた。タクール自身も、ブラフマ協會員たちに会いに出かけられた。マトウールの生存中、タクールは彼に伴われてデベンドラナート・タゴールを邸宅に訪問されたり、アーディ・ブラフマ協會サマシの礼拝行事のときに会われた。後になってケーシヤブのブラフマ協會の集会堂や、サーダーラン協會サマシにも礼拝行事を見に行かれた。ケーシヤブの家には始終おいでになって、そこではブラフマ協會員たちと実に愉快に楽しく時を過ごされた。ケーシヤブも常に、門弟たちを連れたり、あるいは独ひとりでタクー

ルの許もとに来ていた。

カールナーで、バガヴァン・ダース・ババジとお会いになった。タクルルの三昧状態をご覧になって、ババジはこうおっしゃった。「あなたは神聖マハ・ブルシャなる魂マハ・ブルシャであられる。あなたこそ、チャイタニヤチャイタニヤ様の座デーブラに坐られるのにふさわしい御方だ」

すべての宗教は互いに理解し尊敬しあうべし

タクルルは、すべての宗教は互いに尊敬し、仲良くし合うべきものである、とのお考えから、ヒンドゥー教内のヴィシヌ派、シャクテイ派、シヴァ派等の方式の修行方法を実行され、一方、アツラーの一名を称えたり、イエス・キリストを瞑想されたりなさった。タクルルのお住まいになっていた部屋には、いろいろな神々の絵像やブツダ様のお像が置かれてある。イエスが水に溺れようとしているペテロを救っていらつしやる絵も壁に掛けてある。現在でも、その部屋に行けば皆そのままになっているのを見ることができる。最近では、この部屋はイギリス人やアメリカ人の信者たちが入って、タクルルに想いを集中して瞑想しているのがみられる。

ある日のこと、宇宙の大実母にしつこくねだってこんなことを言われた。「大実母マ、クリスチャンというあんたの信者たちは、あんたをどんなふうと呼んでいるのか見たいから、どうしてもわたしをそこへ連れていっておくれよ」数日後、カルカッタへ行かれたとき、キリスト教会の戸口のところから内部で行われている礼拝の模様を観る機会を持たれた。タクルルは戻ってこられてから信者たちに

語られた——「カーリー寺院の支配人に遠慮して、中には入らなかつたよ。そんなところへ行つた人は、二度とカーリー寺院に來ないでくれ、なんて言われると困るから——」

婦人信者と子供たち

タクルルにはまた、大勢の婦人信者があつた。ゴパール・マー（ゴパールII幼児クリシュナを信仰していた婦人）を母親のように思つて、彼女のことを「ゴパールのかあさん」と言つて呼んでおられた。すべての婦人を宇宙の母パガデなる至高者の顕現とみなされて、拜んでおられた。このように、婦人を宇宙の大実母の現れであると感じ出来るまで、即ち、神に対して純粹無垢な信仰が得られるまでは、男性は婦人に関して細心の注意を払わなくてはいけないのだと、常々お諭さとしにいられた。非常に信仰の篤い婦人たちとさえ、交際することを止めておられた。大実母に向かつて、自らこうおっしゃつておられた。「マーよ、もし、わたしのなかに色欲が起とこるようなことがあつたら、マー、すぐに喉をナイフでかき切つておくれ」

タクルルの信者になつた人びとは数えきれぬほどである。それと明らかに世せ上にわかつている人もあるし、知られずにいる人もあり、そのすべての名を挙げることは不可能である。この「大聖ラーマクリシュナ・不滅の言葉」のなかにも大勢の人たちが出てゐる。子供たちも多く出てくる——ラーマクリシュナ、パトウ、トウルシー、シャーンテイ、シャシー、ヴィピン、ヒーララル、ナゲンドラ・ミトラ、ウペンドラ、スレンドラ、スレンなど。それに、小さい女の子たちも大勢タクルルにお会い

した。現在では、その子供たちも皆タクルの弟子になっている。

結 び

この世での活動が終った後に、どれほど多くの人がこの御方の教えを信奉したとか。またなるであらうか。マドラス、ランカー(セイロン)、インド北西部、これからもラージャプタナ(ラジャスタン)、クマール、ネパール、ボンベイ、パンジャブ、日本^{ジャパン}、それにアメリカ、イギリスなどの各地に信奉者の家族は拡がり、そして、この上もお漸次増加しつつある。

ベンガル暦一三二〇年(西暦一九〇三年)、ジャンマスタミーの日(クリシュナの誕生祭)